

---

# 東方フラグブレイカー

未だ来る男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方フラグブレイカー

### 【Nコード】

N3753L

### 【作者名】

未だ来る男

### 【あらすじ】

主人公は名無し

ある日目を覚ますとそこは幻想郷の森の中

わけも分らないうちに妖怪に襲われる名無し

そんな名無しを助ける少女あり

死亡フラグを立てるのが大好きな名無しの運命はいかに！？

？ それは普通では無い出会い（前書き）

初投稿です。誤字脱字とうは許してください＞＜

東方シリーズの小説になります。自分ではコメディーでかこうかと思いますが、ラブコメ要素もそれなりにあると思います。

よかったですら感想ください。

？ それは普通では無い出会い

東方フラグブレイカー

序章 それは普通では無い出会い

「あなた食べても良い人間？」

そう言いながら、見知らぬ少女は微笑みかけながら俺に近づいてきた。

先ほどまで明るかった森の中はいつの間にか暗くなっている。

それがこの少女が原因でそうなったのかどうかはわからないが焦りだけが生まれた。

ここは森の中、助けを呼ぼうにも周りに助けてくれる人の気配がまるでない奥地。

しかしその中で目の前の少女はこの空間に、いやこの空気にとっても馴染んで見えるのはなぜだろうか。

さてどうしようか。なぜだかここ最近の記憶はこんなことばかり起きていく気がする。

今の状況を簡単に説明しよう。俺は森で迷子になっている↓突然暗くなり暗闇で女の子に食べられて↓俺ピンチ。

確にかわいい女の子が暗い森の中で「食べていい？」のシチュエーションは心躍るかもしれない、普段だったとしてもいいかもしれないが今は普段ではない。

今俺の心臓はいろんな意味で躍りまくってる、いや爆発しそうだ。

なぜなら彼女の「食べる」は男性の煩悩を刺激する方の意味ではなく、三大欲求の食欲の意味で言っているからである。

つまりは俺を食事的な意味で食べようとしているからだ。

「それは困るなお嬢さん、そういうセリフは今度ベットの上で言ってくれ」

そう言いながら後退するも、彼女は近づいてくる。一步彼女が動くと俺の心臓も一つ早くなる。

さてどうやって逃げようか、後ろには草木が多い茂って走りにいし前には人食い少女がいるし素直には通してはくれなさそうだ。

まったくもって大ピンチだ。

しかし生命の危機になぜ俺が落ち付いて考えられるか、いやこんな状況で落ち着いてなんかいないな。

そんなやつがいたら是非教えをもらってこの場で変わってもらいたいね。

さて、俺がジョークをはさみながら冷静に考えられるのはこの数日の間に似たような連中から逃げ回っていたからさ。さすがに慣れたくはないが慣れた。

ここの連中はおかしい、そもそも人間ですらない気がする。会う奴そろって襲いかかってくる。

だいたいここがドコなのかが分からない三日間も歩き回って人里ひとつないというのは異常だ。

一人愚痴りながらも事態は刻一刻と迫ってくる。

「ここ最近は生きた人間なんて食べれなかったしなー」

言葉が通じる相手はここ数日では初めて出会ったが出会っていきなり「食べてもよい？」と聞かれてたら話し合いでは解決できそうもない。軽口を言いながら牽制しようと少女に声をかけてみるも

「こらこら本人の許可なく人の体をたべちゃだめだぞ」

「そーなのかー」

「そうなんだよ!」

がつくりとうなだれる俺がいた。

かわいらしいリボンを揺らしながらから確実に間合いを詰めてくる。

「人間を食べる」と言っているのだから恐らくこの子も普通の人間ではないのだろう。

そうすると今まで襲ってきた連中もこの子も同じ生物だってこと、つまり

「化け物だなっ…！」

…ガッ！

瞬間。

彼女は間合いを詰めた。どうやら彼女の射程距離に入ったらしい。凄まじいスピードで繰り出された彼女の手は確実に獲物の急所を狙っていた。

「―ッ！」

間一髪、体をひねりながらそれをやり過ごす。反動で体が地面を転がる。

体を起こそうと顔を上げると追撃が迫っていた。

「もらったよ！」

確実だった。彼女の一撃は間違いなく次の瞬間に俺を絶命させるだろう。

死んだ。どう考えても俺は死ぬ。諦め目をつぶる。

そう死を悟らせるような彼女の一撃。結局何も分からないまま人生



終了か。それで死体は食

べられると。せめて骨は残して埋めてほしいな。

そんな事を考える数秒…、これが走馬灯見る時間か。

走馬灯、走馬灯か、今までの人生を振り返るんだっけか。ふむ、良いことは…何もないな。

他には…ないか。というか思い出せない。何か一つぐらい思い出せるだろうって？

いやそれが無理なんだよね。俺の人生は三日前ほどしか記憶がないんだから。

そう俺は自分の名前すら覚えだせないのだから…

そう思いながら俺は目が覚めた時の事を思い出していた。  
この世界に迷い込んでからの、三日間の人生の思い出を。

\*\*\*\*\*

目が覚めると森の中だった。

空は緑の木々に覆われ狭く見える。周りは薄暗くここが都会ではないことぐらいはすぐに分かる風景だ。

「…どこだ？」

無意識に声を出してしまった。そう呟くほどここは広い森の中だった

のだから仕方がない。

体を起こしながら再び辺りを見直してみた。ここで目が覚めたという事実がすぐに寝起き

の意識を覚醒させた。自分がなぜここで寝ているかを考えたが想像もつかなかった。

さて頭が回り始めてから次々に疑問が浮かび上がってきた。何か事情があつてここにいいのかどうかなど考えたが思いつかない。

だいたいどんな事をすればこんな森の中で目が覚めるんだ。

まあ落ち着こう、冷静に思い出すんだ昨日の夜に何をしたか。

昨日はどこで寝たのか？家の部屋で寝るのが常識だろ。部屋に…ん？

ふむ、えーと昨日…あれ？いやまて、落ち着け酒は入っていないぞ。

昨日が思い出せない。というよりいつもはどういう生活してたんだっけ？

家族は…家の場所は…友人は…俺の歳は？

…あれだ、えっと俺の名前は…だれ？

……あれ？

「結論、俺は記憶喪失で知らない森の中で目が覚めた！」

とりあえず声に出して叫んでみた。叫んだところで誰の返事もない。

意味が分からないぞ、そもそも記憶喪失の人間が森の中で目覚めることが謎だ、病院のベッドの上ならまだしも森の中で目が覚めるなど異常だとすぐ分かる。

そう冷静に考えながら、自分の持ち物も調べてみたが自分の身分を証明できるものが何もない。財布もない携帯もない。尻ポケットには小銭が少し入っていた。これは恐らく円だろうか。

一般的な知識や常識はお覚えてる。思い出せないのは自分が何者かってことだ。

円を持っていたということは日本人なのだろう声に出す言葉も日本語だと理解できた。

自分の事は置いといてとりあえずここにいてもようがない。

周りを見渡して見る、木木木。つまり森だ。人に会えるのがベストだ。

とりあえず歩いてみるか。そう考え俺は歩き始める。

さて俺は5時間ぐらいは歩いたんじゃないかと思われる。  
なのに…

「なんで民家も何もないんだ！」

やはり叫んでみる。

しかし冷静に考えるとこれはおかしい。これだけ歩いても何もないとなると余程人里離れた場所にいるという事だ。

それだけなら途方にくれるだけだが、そこに俺はたった一人にいる。つまり記憶を失う前の俺はどうやってここに来たのか、これだけの森の奥地に何も持たずに倒れていたことが異常。ここまでくる手段が歩き以外にあるはずなのだ。

しかし俺が倒れていた場所には車や何か乗物の跡どころか人の足跡すらないときた。

つまり誰かに運ばれたか、最初からあの場所にいたのか自分で歩いた以外の方法であそこで倒れたのだ。冷静になればなるほど不可解だ。

「どうも考えがまとまらないな」

ここで少し休憩でもとるか。さすがに5時間はつかれた。喉も乾いたし足も腫れている。

そう思い俺は近くにちようど良く倒れてた木に座ろうとした。

ぴちゃ…

木に座ろうとしたとき何か音がした。

「？」

なにか聞こえた、そう思い振り向くとそこには目があった。

「え？」

訳が分からなかった。ただその大きな目玉が俺を見ていた。

本能的に危険を感じる。汗が体中から出る。その場をすぐに走った。

いやな想像は当たるものだ。一つ目の何かは俺を追いかけてきた。

体中を嫌な汗がながれる。まちがいない、あいつは俺を：

頭の中に恐怖というものが生まれる。自分の知らないうちに悲鳴をあげていた。

びながら必死に走った。捕まったら命はない。おそらく言葉が通じる相手とは思えなかった。アレは人じゃない。巨大な目玉をぎらつかせ奴は追い付いてくる。このままでは追いつかれるだろう。俺は走りながらなんとか冷静になろうとする。

「どうするか：なっ？」

一瞬、何が起きたのか分からない。足元を見るとそこには地面がなかった。

俺の体が宙に浮いた、すぐに理解した。そんなに高くない崖から落ちたのだ。

「のあああああああ！」

崖を転がるように落ちた俺だが意識はしっかりとしてる。体中痛い

が、足まだ動く。転がるように落ちたが擦り傷だけですんだらしい。

「ッ！」

すぐに自分が追われていたことを思い出した。そうだ、あいつはどうした？上を見てみると、崖の上のほうで奴が通り過ぎていくのが見えた。

助かった。とりあえず命は助かった。生きていると思うだけで嬉しくなった。

しかしこれからどうするか、あの生物は一体何なのか。いろいろな考えが浮かんだが今体が休みを欲していた。

とにかく休みたい。それになによりも水が飲みたい。俺の喉はカラカラだった。そう思った時、幻聴かかすかに水の音が聞こえたような気がした。

湧水か、何か、ともかく行ってみよう。このままでは本当に死んでしまう。

音の方向に歩くにつれて、その音は水の音だと確信した。

しばらく歩くととても広い所にでた。見てみるとそこには小さな川があり湧水があった。

そつと水を手ですくう、透き通ってきれいな水だ少しだけ口に入れる、苦くもなく綺麗だど

うやら飲みそうな水のようにだ。そのまま口に運ぶ。水がのどを通り一息ついた。

「助かった…」

そう呟きようやく自分の身の安全が実感できた。こうして俺は一命を取り留めたのである。

\*\*\*\*\*

そんな感じで三日間の間に様々な死線を潜り抜けてきた俺。

別の化け物に襲われたり、食料が見つからなかったりと三日間で精神的にもかなり成長できたと思う。多少のことでは驚かないぐらいの常識もできた。

そんな俺もここで終わ리と思うと急に寂しくなるものである。さて走馬灯も見たしそろそろ死ぬのかな、結局何も分からなかった。俺はいったい誰なのかも。

やけくそになって体の力を完全に抜いて大の字になった。これでは防御も何もないだろう。

たとえば防御したところで彼女に俺では勝てないし逃げ切れもしないだろう。

神様もう充分走馬灯は見ました、早く終わらせましょう。何もないのが逆に恐怖だ。

しかしそう思いながらも俺は違和感を感じはじめた。

：おかしい、いくら待ってもとどめが来ない。それどころか気配がない？

目をつぶっているのに何やら視界が明るい気がする。つよい光か何かが俺の目の前で放たれている？　というか何だこの轟音は！？　目開けても良いよな…

俺は好奇心に負けて目を開いた、思わず声が出てしまった。

「な、な、なんじゃこりゃー！」

目を開けてみるとそこには、極太のレーザーが通過していたのである。

それは虹色のレーザー、何やら星まで見えるがなによりもただ一言

「綺麗だ」

目の前の光はしばらくすると消えて無くなった。後に残ったのは焦げた地面と木の破片。

俺を襲っていた少女はいなくなっていた。耳がキーンとしている。

放心状態の俺がなんとか正氣に戻ったのは少女の声だった。

「あーもしもし？　生きてるかー？」

いきなり現実に戻された気がしたが再び謎の呼ぶ。先ほどまで誰もいなかったはずなのに別の少女の声がする。確認のためその声の主を見たときその少女が俺の知ってるあるものに似ていたためつい思ったことを口に出していた。



「えーと魔女？」

白黒の服を身にまとい大きな帽子をかぶり、箒を持っていた。

記憶には無いが絵本なんかに出てきそうな魔女のような格好。

少女は俺が言葉を話せる事を確認したようでこちらに歩いてきた。

箒を担ぎながら近づいてくる少女は大きな帽子をかぶりなおしながら言った。

「普通の魔法使いさ」

それが彼女たちとの出会いの始まりだった。

？ それは普通では無い出会い（後書き）

いかがでしょうか？

つまんねと思った人、すいませんでした。次も頑張るので次も読んでください。

続きが読みたいと思った人、それだけで次を書く元気になります。

できればご意見ご感想をください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3753/>

---

東方フラグブレイカー

2010年11月12日21時15分発行